

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	音声言語とともに
Author(s)	田中, 信夫; 高橋, 良子; 堀江, 久子
Citation	児童の言語生態研究 , 10 : 25 - 27
Issue Date	1980-05-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045113
Right	
Relation	



音声言語とよみに

声優 田中信夫

へ仕事について)

多くの商売というのは、おもしろい商売
 できてね、声優は、声でイメージの世界が
 作れる、そこがおもしろいんですよ。そ
 のままで、なんていうのならおもしろくな
 いじゃないですか。そうやって一つのフィ
 クションを、イメージの世界を作
 り出す、それこそクリエイトするというこ
 とは、すばらしいじゃないですか。ぼくは
 サンダース軍曹とか、シドニーホワチエと
 か、カッコいい役が多い。だから、実際の
 ぼくに会おうと、人は：？。そこで私は、ち
 きしようと思う反面、ざまあみる、してや
 ったりという気もして来るのです。

私は、音声で、人間を感じさせるような
 仕事をしたいと心がけていることになりま
 す。それこそ、体温から脈搏から血圧から
 その感情を声だけを頼りに出してみる。あ
 るいは聞かせる：。むずかしいことですが
 れども、せめて、そう思わないことには、
 つまらないじゃありませんか。それこそ陰
 の声や、人の後ろにかくれてただ吹き替え
 をやっているだけじゃつまらない。だから
 俳優が衣装を着たりメーキャップしたりす
 るのと同じように、画面の俳優を衣装やメ
 ーキャップだと思わしてね、演技してい
 るのは、おれなんだぞって：。本当は表
 に出てやりたくてしょうがないんですけ
 ど：。

私は、アテレコなんか、ぬり絵のようだ
 と感じる時があるのです。画面の人物があ
 り、ストーリーがあり、つまり輪郭があっ
 て、ここに赤を入れて、こっちは青を入
 れてと、まるでぬり絵をしている感じがす
 るのです。もちろんそれじゃあ、おもしろ
 くないのです。ここをこうやったら、おれ
 はこういうふうな思うというふうなことな
 ら、それでもいいような気がするのです。
 もちろん、その思ったことが、素直に表
 現できてるかが問題なんですけれども、あ
 ってるか、線からはみ出しているか、白い
 ところが残っているかというふうなこと
 神経使うことは、どうもよくない。でも、
 その方が、楽なんです。世の中は、この
 字は、あっているのか、このアクセントは、
 あっているのか、あいつ、とちったか、とち
 らないかってことが一番わかりやすい、簡

単なことなんです。
 見ていましてね、アテレコっていうのは
 下手だなあって思っちゃう：。みなさん
 だって御覧になっていまして、ああいうの
 に、リアリティ感じられますか。例えば、
 怒っているようなことだなんていうのはわ
 かるけれども、ほんとうに泣いていると思
 えますか？ いや、そりゃ全部だとは言いま
 せんよ。でも、それでも、現在では通用し
 ているのです。
 自分の人間性をさらけ出すのが怖いから
 本当の自分を出さないで怒ったふりで逃げ
 るんです。声優の一員として、アテレコを
 やっている人間の一人として、その境界が
 勝負どころで、そこをどう挑むか、ところ
 が、易きについて逃げ出してしまうのです。
 私は、それがくやしくて、くやしくてしよ
 うがないんです。

アテレコに出て、ああ、くやしいなあって思いますね。人間の声を出さなかったら人間にはねえ、反応してもらえないんだもの。

アテレコの他に、教材やプリントも読まなくちゃならない。やっぱり、あの朗読というのは、構えてもいけないんだけれども音読するのに、適当なっていうか、いい文とらしくい文とありますね。読むために作られた文っていうのでしょいか、私たちにとっては、気持ちが楽しくなるような文がいいですね。

絵本なんか、そりゃ絵も大事だし、色々あるでしょうけれども、あの活字の組み方っていうのは、本当にこれを子どもたちが読む場合に、どうかなっていうふうに、考えてやる必要があるのではないでしょいかね。

古典が読みやすいのは、書く人が、読まれ聞かれることをちゃんと意識していたのだと思いますよ。

音読の楽しさというのは、あると思います。声に出して読みたくなるという、声を出して読むと楽しいというような、子どもたちに、そういう楽しさを教えてやりたいと思います。そういう楽しさを与えてやることはいいことだと思ふのです。

へ感情とことば

「いい声」というのは、不必要な緊張や抵抗がなく出ている声だと思ふわけです。素直で屈託のない声を出すために、一生懸

命やるんですけれどもね、常に、自分自身で、屈託のない素直な声が出ているか、出ていないかということを見極めていような気がするのです。

子どもの頃、読んだ話で、私は、ずっと、それを伝説だと思っていたのですが、ある外国の大女優が、パーティーに招待され、その場で持ち前の演技を披露するよう頼まれたのです。彼女は、そばにあったメニューを取り上げ、読み始め、そして、喜怒哀楽をととうとやっていたのけたというのです。でも、今、私は、それはやっぱり、ありうることだと思えますね。ことばは、たとえボテトチップにサンドウィッチと言っているもそれにこめられた感情は聞いている人に伝わると思うのです。

書かれたセリフを読んで、果して、この読み方でいいのだろうか。感じを、ここで出したらいいのか、出さない方がいいのか、ここは、どんな声で、低い声で出したらいいのか、高い声で出したらいいのかいろいろ考えてしまうわけです。

けれども、実は、全くそんなことは関係ないのです。悲しい文章だから、悲しそくに読めばいいと思うけど、そうじゃない。悲しくならなければだめなんです。本当に悲しかったらね、どんなしゃべり方をしたっていいんです。例えば、これは、アテレコで当の人物が外人の場合、ちょっと外人っぽいような感じの声を出すということは、私はいいと思ふんです。かえって、その方

がいい。けれども、まず、大事なのは、自分自身の悲しみの感情、つまり、自分の中のリアリティなのです。

私たちの仕事におけるリアリティとは、実際の行為ではなく、あくまでも、感情の問題です。人を殺す場面では、もちろん実際に殺すことが、リアリティではなく、そこにある殺したくなる程の強い怒りや何かの感情がそれと言えらると思います。

台本に書いてあるとおりに、「待て」といくら大きな声を出してもだめなんです。小さな声でもね、本当に待ってもらいたいと思ったら「待て」と言えばいいんですよ。もし、本当に待てと思えなかったら、しょうがないから、「待て、待て」と言うしかないのです。それを、さもあるような顔をしてしたりして、声を出すと、かえって内に感情がないことが、ばれてしまう。

だから、私たちの仕事は、自分の内にある感情に頼るか、その感情が生まれぬ場合は、感情を全く捨てて、ことばに頼るかのどちらかですよ。でも、その葛藤が、おもしろいんだと思ふんですよ、お客さんにとっては。

さらに、また難しいのは、自分は感情があったと思っても、人に伝わらないことがありましよう。リアリティがあれば、全部それが伝わるというわけではないのです。私は、やっぱり二十年間、そういう、ことばを使って商売してきたせいか、職業病とも言うんですか、どういふふうにしや

べろうかな、どこで間をとろうかな、どこでちょっと声を落とそうかな、大きくしよらかな、なんてことが、無意識のうちに、潜在的に働いてしまうわけです。

せっかく、感情を、リアリティを自分の中に培って置いて、いざ読む段階になってそれが、ふとなくなってしまう。これは、何故かという、そこに、セリフを読むという不必要な緊張が、そこで出てきてしまうからです。そうすると、せっかく培ってきた本物の感情はどこかへ行ってしまふのです。セリフというのは、つまり心の中で構えてしまっているわけでしょう。意識して、私は声優なんだから、セリフはトチらないで、明瞭に言わなければならぬとして、自分で自分を規制してしまふわけですか、人間というのは、そういういろんな抑圧というか、自己コントロールが必要以上に多いんだですね。いい声を出して人を驚かせようとかね。

だから、そういうのを、見極めて、取り去っていかないと、素直な屈託のない声は出すことが出来ないし、感情も生まれてこない。

不必要な緊張を取り除いた状態、それがリラックスなんです。リラックスの状態にあってこそ、その場に必要感情を呼び起こすことができる。リラックスすれば、七十五パーセント成功だっていわれています。もちろんとたんに、その力が出てくるわけでもありません。自分が、今まで培ってき

た力を、その場でどれだけ出せるかが問題なのです。しかし、それが、他に気が散っていて、そのことに集中できない、つまり、リラククスできていて、始めて可能だということなのです。

不必要な緊張を取り除くことがどういうものか、一つ、私の経験を話しましょう。私が声学を習っているところの先生が、ある時、こう言うのです。泣きながら歌ってごらんなきいって、すると私は、一生懸命泣きながら、もちろん泣きまねで、歌ったのです。そして、それをテープにとり、後で聞いてみると、泣きまねどころか、すごく、屈託なく楽しそうに歌っているように聞こえるんですよ。

それは、何故かって言うと、この音程はどうかとか、いい発声で歌っているのかなとか、そういう自己検閲が、全くなくなっしてしまっていて、もう泣きまねだけに集中していますから、他の緊張が消えてしまっているからなのです。

その点、子どもは、いいなあと思います。子どもは、実にリラククスが、うまい。そこへ行くと、大人は、だめです。ここでちょっといいところを見せて、あいつはうまいと思わせたいとか、トチってあいつからへんなこと思われたくないとか、常に、そういう意識がわいてきますものね。

私たちの仕事では、そのリラククスをどう、いかにしてうるかが問題なんです。それには、五感の記憶をつかうことです。も

うすぐ本番だという時、そろそろ自己検閲が始まるという時、自分が一番よく使っているもの、例えば、コーヒーカーップとかをね、思い出してみる、それも頭で考えないで、自分の五感を使って思い出してゆくのです。触覚があつて、それから、味、音、そしてまた匂いもあるでしょう。「いい匂い」って、やるんですよ。そうしてゆくと人間の感情なり、なんなり、潜在的にぐっど押し込められてきたものが、フアーと出せることよって、その自己規制が忘れられて、本来の感情が、そう豊かなものが、あらわれてくるように思います。

へことばと音声

ことばと音声というのは、ほんとうに不思議な関係にあるものですよ。私なんか、落語など憶えるときは、自分で吹き込んで聞きながら憶えるのです。それも、変に機械的に正確にしゃべっているのだめなです。リアリティがないと憶えにくい。

ところが、リアリティがあると印象深く記憶されます。だからいいものは、すつと憶えられる。つまらないのや、へたなのといふのは、どこか、琴線にふれるところがないでしょう。そこにふれて来るものがやっぱり、いいものなんでしょうね。

こんなことがありました。失敗談なのですが……書いたもの(台本)をひよっと見まして「マサチュー」って言ったのです。書いてあるのが違っていたのです。書いた

ものにこだわらなければ、マサチューセツなんて、そんな難しいことばでも何でもない。けれども、ただ慎重にへましちゃいけない、いけないと思っている気もある。だから、ついついそういうものに頼る。すると、マサチューセツとか何とか書いてあったら、もう間違えちゃった。だからことば(文字)は怖いですよ。音声に頼ればよかったのね。書かれたものに頼ったばかりに、そんな目にも会うのです。

鼻濁音なんか、鼻濁音にしよう濁音にしようという意味は全然かわらない。しかし発音を正しくするために、その音声が、快く伝わるか快くなく伝わるかということだけだというのは、あまり説得力を持っていないでしょう。ことば(文字)の前に

音声があったから、だから音声でやってみれば、やりやすいということであり、抵抗がない方がやっぱり正しいということがいえるんじゃないでしょうか。

へ声の年齢

私も不思議に思うことの一つなんですけれども、声というのは、意外と変わらないものなのです。そりゃ、全然変わらないとは言いませんけれども、声の年齢というもの、どこで見るのか、私にもよくわからないのです。ただ、私たちだって、こういう商売だから、おじいさんの役とか、若い役というのと、一生懸命やりますけれどもそれは、ほんとうはうそといわねばなりません。たとえば、「おじいさん(しわがれ

声で)」「こんなしゃべり方するような人というものはいないですよ。ところが音声というものは、真実じゃないのだけれども、先に言った言い方をするとわかるですよ。これは不思議なことですよ。

あまり声質自体変わるものじゃないけれど、変わるとしても、非常に微妙ですね。それを私たちの場合は、表現しなくちゃならない場合があります。例えば、一人の人間が子どもの頃からずっと、となっておじいさんになる場合だってあるわけですよ。するとやっぱり、おじいさんばい声を出さなくてはならなくなってしましますものね。その時は、すごく恥しい気がするのだけれども、恥しいっていついたら……。そこで、やっぱり、先行しちゃうのは、引き出しの演技です。おじいさんみたいな声の出し方とか……。

声変わりする前と後では、全然ちがうでしょ。声変わりした後というのは、あんまり変わらないですよ。声とともに人間の感覚的成長は、止まるんじゃないから、ね。だからせめて、なるべく鈍感にならないようにすることなんですわえー。

昭和五十五年一月二十日、本会のために、会員下鳥照子宅にて、談話して頂いたテープよりまとめたものである。

(文責 川崎・稲田小・教諭 高橋良子
神奈川・大野南小・教諭 堀江久子)